大日本史 第六回

二・二六事件から日中戦争へ

トルコ革命が昭和日本に与えた影響とは。
「外交のプロ」たちはなぜ判断を誤ったのか。昭和の深層に切り込む

山内昌之
明治大学特任教授・東京大学名誉教授

佐藤 優
作家

山内　昭和十一（一九三六）年二月に起きた二・二六事件は、陸軍の現役部隊が起こしたクーデターという意味で、昭和史でも突出した事件です。その前には、昭和七年、海軍の青年将校らが官邸で犬養毅首相を殺害した五・一五事件がありましたが、加わった人数も二十人程度で、いわば集団による暗殺テロといえる。それに対して、二・二六事件は陸軍第一師団の歩兵第一聯隊と第三聯隊の有力中隊が中心となり、千五百人近くが動員された軍事クーデターでした。その歩一、歩三のあったのが今の東京ミッドタウンと国立新美術館の敷地ですね。

佐藤　今の若い世代は、あのあたりが戦後に旧防衛庁だったことも知らないかもしれません。

山内　そう。六本木から外苑東通りに沿って乃木将軍邸があり、陸軍大学校（現青山中学校）から権田原の練兵場に抜けるわけです。いま盛り場の六本木がまさに軍都の中核だったというのは、若者にとってタイムスリップの世界でしょう。

トルコ革命と橋本欣五郎

山内　二・二六については様々に論じられてきましたが、ここでは少し角度を変えて、この二・二六事件に至る国家改造運動を世界史のなかで見てみたいと思います。

昭和の国家改造運動に大きなヒントを与えたのは、第一次世界大戦後にケマル・アタテュルクらが主導したトルコ革命でした。善悪の評価は別として昭和の国家改造運動を実動的にリードしたのは、基本的に陸軍の青年将校だったといえます。そこに北一輝や西田税、大川周明といった超国家主義者たちが結びつくのですが、そこで注目すべきは昭和五（一九三〇）年に結成された「桜会」ですね。陸軍の省部将校を核に、軍部独裁政権を目指したもので、この発起人となったのが参謀本部ロシア班長の橋本欣五郎中佐でした。

佐藤　後に参謀長として沖縄戦を指揮した長勇も、この会の中心人物です。彼らが大川周明らと手を組んで、昭和六年に、三月事件と十月事件という二つのクーデター未遂事件を起こすのですが、クーデター計画を首謀したにもかかわらず、橋本も長も謹慎程度の軽い処分で、軍にとどまってしまう。この処分の不徹底さが昭和の軍を大きく歪めていきますね。

山内　十月事件に至っては、組閣名簿まで用意していて、荒木貞夫が首相、橋本が内務大臣、長勇は警視総監、大川周明が大蔵大臣、北一輝が法務大臣となっていた。何とも顔ぶれとポストの組み合わせの妙がすごい（笑）。結局は、途中で計画が漏れ、首謀者たちが憲兵隊に一斉検挙されて終わるのですが。

そこで重要なのは、この桜会のリーダーともいうべき橋本欣五郎の経歴です。彼はロシア語のスペシャリストで、桜会発足時（昭和五年十月）には参謀本部ロシア班長でしたが、その直前の六月まで、トルコのイスタンブールで駐在武官を務めているのです。橋本のトルコでの仕事は、おもにコーカサス地方など中央アジア情勢の情報分析でした。中央アジアのムスリムやトルコ系、あるいはチェチェン人やカバルダ人といった民族の動きを把握したうえで、ソ連との間に争乱を起こすような工作を担当していた。これはもちろん日露戦争時の明石工作、明石元二郎が行ったロシアでの反政府運動の支援に倣ったものですが、もうひとつ、橋本が大きな影響を受けたのが、まさにトルコ革命でした。

橋本がトルコに赴任したのは昭和二（一九二七）年ですが、その五年前の一九二二年にケマル・アタテュルクはオスマン帝国を廃絶、翌年にトルコ共和国の大統領に就任します。重要なのは、一九〇八年の青年トルコ党革命から一九一九年以降の独立戦争というトルコ革命を主導したのが、アタテュルクやキャーズィム・カラベキル

やまうち　まさゆき　1947年生まれ。東京大学学術博士。2012年東京大学教授を退官し、現職。著書に『中東国際関係史研究』（岩波書店）、『幕末維新に学ぶ現在』（中央公論新社）、『歴史という武器』（文春文庫）など多数。

さとう　まさる　212ページ参照。

（のちの国民議会議長）、エンヴェル・パシャ（のちの陸軍大臣）などイスタンブールの陸軍士官学校を卒業した若手軍人たちだったことです。

佐藤　今日まで、トルコで最も近代的な組織は軍隊ですからね。まさに建国以来の伝統です。

山内　橋本はトルコ革命の成功を目の当たりにして、軍人による国家改造というアイデアを抱いて帰国するんですね。そして、帰国後ただちに桜会を立ち上げたわけです。

だが橋本たちにはアタテュルクやカラベキルのような明晰な頭脳、緻密な政治的思考が欠けていた。また粘り強く同志を獲得するといった手間もかけずに、安易にクーデターが起こせると思っていたから、失敗に終わったのも当然でしょう。エンヴェルは橋本の方に似ている。中央アジアまで出かけて赤軍と戦って死ぬ顛末は、私が『納得しなかった男』（岩波書店）で描いた通りです。しかし、橋本らの動きが暴力、軍事力を使って政治に圧力をかけるやり方の嚆矢となったのです。

佐藤　三月事件というのも奇妙な事件で、右翼団体に軍から爆弾などを横流ししてテロを起こさせ、議会に圧力をかけて、当時の浜口内閣を倒し、陸相だった宇垣一成を首相に据えようという、どこまで実現可能だと思っていたのかも怪しいものですが、問題は宇垣の側近だった小磯国昭軍務局長などもこの計画に関わっていたことです。小磯は当時の部下だった永田鉄山軍事課長に計画案のメモまで作らせている。もっとも永田自身はこの杜撰な計画に大反対だったそうですが。

もうひとつ興味深いのは、『回教概論』の著者でもある大川周明が、当時の知識人としては例外的に中央アジア、中東に強い関心を持っていたことですね。

山内　大川には中東に旅行したり滞在した経験はないのですが、アタテュルクやエンヴェル・パシャに至るトルコ陸軍の革命運動の流れを知識としてよく知っていました。イランやアラブも扱った『復興亜細亜の諸問題』は中々によくできた本ですよ。

さらに世界史を俯瞰して、トルコ革命を果たしたアタテュルクらにもっとも大きな影響を与えた歴史的事件は何かといえば、日露戦争なんです。トルコは十九世紀に四回も大きな戦争をやり、いずれも領土をとられた。その最大の敵国はロシアでした。だから彼らは、そのロシアを倒した日本陸軍、乃木希典はもちろん黒木為楨、奥保鞏、立見尚文、そして大山巌、児玉源太郎らの将軍を、畏敬の念をもって研究していたのです。アタテュルクがギリシア軍を撃退したサカリアの会戦は、奉天会戦に倣った作戦でした。アジアの小国である日本が近代化に成功して、ついには大国ロシアを打ち破った。その事実への感動、共感がアタテュルクらのトルコ近代化、国家改造につながった。これも世界史の面白さですね。

佐藤　橋本が参謀本部のロシア班長だったという文脈で言うと、陸軍内のいわゆるロシア通の存在も気になるところです。そこで面白いのが、当時、陸軍省新聞班長だった秦彦三郎の書いた『隣邦ロシア』（昭和十二年）です。彼はロシア語が堪能で、自分の実体験も交え、ソ連を冷静に評価している。ソ連の国家改造をみて、計画経済の成功や、科学技術を中心とした教育水準の高さなど、ここから共産主義さえ除けば、われわれが学ぶところは少なくない、という観点をもっているわけです。つまり総動員の体制づくりという問題ともつながってくる。

山内　彼は後に陸軍大学校校長も務め、終戦時には関東軍の総参謀長として停戦交渉も行っていますね。日本軍人のシベリア抑留を考える上でも鍵を握る人物です。

青年将校と「官僚制の暴走」

佐藤　いま二・二六事件をみていく上でもうひとつ重要だと思うのは、彼らの行動をリアリズムの視点でみることだと思います。ともすれば、「国を憂うる青年将校」「農村の疲弊などを放置する腐敗した支配体制への異議」などとロマン主義的に語られがちですが、本当の青年将校たちの内在論理をみていくと、「官僚制の暴走」という側面がみえてくるのではないか。

というのも、一九〇五年の日露戦争以来、第一次世界大戦やシベリア出兵などはあるものの、日本軍は三十年もの間、存亡を賭けたような本格的な戦争からは遠ざかっているのです。それによって、軍における組織原理が変わってきます。つまり、図上演習や書類の書き方といった実戦とは異なる能力によって評価されるようになる。

山内　武人、現場指揮官としてではなく、実務官僚としての評価で、序列づけがされるようになるわけですね。

佐藤　そうです。組織の仕事は大きく分けると、企画立案、実行、評価の三つです。この三つが相互にチェックし合うことで、仕事の精度は上がっていく。しかし、昭和の日本陸軍では、この三つをすべて自分たちの内部で行い、どこからもチェックされない状態になってしまった。そうなると何が起きるかといいますと、自分たちで計画し、自分たちで実行しますから、失敗という評価は下されなくなるのです。すると、すべては成功か大成

功になってしまう。こういう組織は暴走しやすいのです。

そうした観点で、二・二六事件をみたときに強く感じられるのは、「自分たちが本気で訴えれば、幹部たちは言うことを聞くだろう」という青年将校たちのある種の全能感です。要するに脅し、ゴネ得の構造ですね。本当にこれまでの軍のシステムを転覆し、自分たちが新たな仕組みを作り出すのであれば、もっと綿密で具体的な体制づくりまで見据えた準備をしていたはずです。

もうひとつの問題は、二・二六事件自体は失敗に終わり、首謀者たちは処刑されますが、軍隊の暴力に対する恐怖、怯えが政治社会に刻み込まれたことです。そして、それによって得をしたのが、青年将校たちを押さえ込んだ統制派だった。さらに統制派は二・二六的なメンタリティーを取り込み、「皇軍思想」を強調するようになるのです。たとえば二・二六事件の翌年、杉本五郎という中隊長が戦死し、彼が息子たちに遺した遺言が、平凡社から『大義』というタイトルで出版され、ベストセラーになります。杉本は二・二六事件を不忠、「皇軍の恥」と激しく非難しますが、「尊皇の心あるところに我あり」と天皇のために身を捧げることこそ日本人の唯一の生き方だと激しく説いている。こうした心性を、軍幹部は自らの支配に利用していったわけです。

山内　国民心理への影響という意味でも、二・二六事件は昭和史ひいては歴史そのものの大きなターニング・ポイントといえるでしょうね。

広田弘毅と多田駿

山内　そして二・二六事件の翌年、昭和十二年の七月には盧溝橋事件が勃発、日中戦争が始まります。これが日本にとって引き返すことの難しい泥沼になっていくのですが、そこに至るまでのプロセスをきちんとみていく必要があります。

どうしても戦後の日本では、「陸軍が暴走し、この国を戦争に引っ張っていった」という見方が支配的ですが、日中戦争に関しては、必ずしもそうとは言えない部分が多い。

佐藤　同感です。まず大状況からみれば、昭和を通じて、陸軍が最も警戒し準備しているのは対ロシア戦なんですね。少なくとも陸軍の一部には蔣介石の中国と長期戦などやっている場合ではない、という認識があった。

山内　まさしくそのとおりで、盧溝橋事件の後、当時、参謀本部作戦部長だった石原莞爾は戦線不拡大、和平路線を唱えます。それに対し、陸軍省では杉山元陸軍大臣

や梅津美治郎陸軍次官などが拡大派で、内地から三個師団を送ることを決定する。そして翌年（昭和十三年）一月に、首相官邸で大本営政府連絡会議が開かれるのです。

このときの参謀次長は多田駿でした。時の参謀総長は閑院宮載仁親王でしたから、事実上の参謀本部のトップです。この多田が戦線拡大に断固反対し、蔣介石との和平交渉継続を訴えたのです。それに対し、和平工作の打ち切りを主張したのが外務大臣だった広田弘毅でした。城山三郎の『落日燃ゆ』による広田の描き方は、何かにつけて美しすぎて疑問が多い。後で出てきますが、幣原喜重郎の対中外交のフェアさと粘り腰とはまったく違うのです。城山氏の小説や映像化によるフィクションは、歴史の真実を錯覚させるという点で怖いものがある。

佐藤　広田は明治三十九（一九〇六）年に外務省に入省し、外交官として欧米局長、駐ソ連特命全権大使などを歴任するというキャリアを重ねて、昭和八年、斎藤実内閣で外相に就任。以降、四つの内閣で外相を務めました。ちなみに吉田茂は外務省での同期です。

山内　私は、この広田弘毅という人物がよりによってこの時期に外務大臣の座にいたことがたいへん不幸だったと思います。

第一に、彼は中国に対する強烈な先入観をもっていたからです。支那は物事の約束を守らないとか、表面的な印象論を展開し、この連絡会議でも「永き外交官生活の経験に照らし、支那側の応酬ぶりは和平解決の誠意なきこと明瞭なり」と決めつけるのです。

第二に、広田は外交官出身でありながら、世界の中での帝国陸軍の実力を過大評価し、杉山ら陸軍省の強硬派が主張する賠償金の請求など、中国が受け入れにくい条件を刺激的に出してしまう。しかも、講和か戦争かといった、国家にとっての重大な決断について、中国に対して、わずか十日ぐらいで回答せよと迫る。外交官出身の広田なら、これがいかに無理難題かよくわかっていたはずです。このあたりは岩井秀一郎氏の『多田駿伝』に詳しく、城山氏の小説とぜひ比べてほしいものです。

それでも交渉継続を主張する多田に対して「参謀次長は外務大臣を信用せざるか」と恫喝（どうかつ）した広田は、ドイツによる、日中調停のためのトラウトマン工作の打ち切りも決定します。普通考えられがちな陸軍と外務省のイメージがここでは逆転しているのです。その結果、近衛文麿首相が出したのが、「国民政府を対手とせず」で有名な近衛声明でした。つまり蔣介石の国民政府を相手にしない、と宣言するのですから、外交的解決など望めるはずもありません。

まさに歴史の皮肉というか、広田と同様、日中戦争が泥沼化していくのに大きな責任がある人物が、リベラル派として描かれることの多い米内光政海軍大臣です。米内は全体として海軍歴代でも屈指のリーダーだったことは間違いありません。しかし、この時の連絡会議で、米内は「政府は外務大臣を信頼す。統帥部が外務大臣を信用せぬは同時に政府不信任なり。政府は辞職の外なし」と発言しています。つまり、政府はもう和平打ち切りで決めたのだから、参謀本部はそれに従えと圧力をかけているわけです。

それに対して、多田参謀次長はこういう趣旨の反論をおこなっている。明治天皇は「朕に辞職なし」と言われたではないか、こうした重大事に辞職をほのめかすのが責任ある大臣のすることか、と。これは正論で、このときはむしろ多田の率いる参謀本部のほうが筋の通った議論をしていたのです。

「ABC外交官」の危うさ

佐藤　今の広田のお話は非常に示唆的ですね。それで思い出したのは、「ABC外交官」という言葉です。これは終戦時に外務次官だった松本俊一が遺した名著『モスクワにかける虹』で重光葵を評したものですが、若い頃アメリカ（A）やブリテン（B）で研修し、そのあと中国（C）で仕事をする。広田はまず北京に赴任した後、ロンドン、本省に戻って通商局課長を経て、ワシントンという経歴で、順番はともかくABCの条件を満たしています。これは吉田茂も同様で、天津、奉天を振り出しに、英米の大使館に勤務した後、長く中国にいた。つまりは当時の外務省のトップエリートだったわけです。ちなみに松本自身はフランス経験の長いフレンチスクールでした。

松本の分析は、私自身の経験に照らしても頷けるところが多い。まず、この「ABC外交官」に共通しているのは、相手を「かわいい」「かわいくない」に分けることです。自分の言うことをきく者は「かわいい」と目をかけるけれど、言うことをきかない者は「かわいくない」と厳しい扱いをする。これは部下だけでなく、相手国に対しても同じです。自分が操作できるときには、有益で重要な友だちだと持ち上げて、自分の思い通りにならなくなると「暴支膺懲（暴虐な支那を懲らしめよ）」と転じる。

山内　しかし、自分の部下ならともかく、他国の人間に対して、かわいい、かわいくないもないでしょう（笑）。

相手の外交官だって一国を代表しているのですから。

佐藤　まさにその通りで、相手を対等のパートナーと見ていないのです。つまり主権国家間の交渉や取引ということをよくわかっていないんですね。こうしたタイプが危険なのは、自分が格下だと感じる相手、たとえば中国には強硬な態度に出るのに、立場が上だと思っている相手、アメリカや英国には不遜な態度はけっして見せず、「かわいい」と思われようと、迎合的になりやすいことです。

山内　それはよく分かるね。外務省に限らず、どこの組織にもありがちなタイプです。

佐藤　『モスクワにかける虹』で描かれている重光葵の北方領土交渉などはその典型です。松本がロンドンで下交渉に当たるのですが、日本の立場は四島返還なのに対し、ソ連のスタンスからして二島より上の条件で妥結するのは難しい。すると重光外相が交渉が拙劣だと批判して、自分がやると乗り込んでくるわけです。そして最初、南樺太まで返還せよといった交渉を始めるのですが、しばらくすると、ソ連が強硬だから二島で手を打つと言い出す（笑）。そこで松本は独断で決めないでくれ、とにかく本国に鳩山一郎首相の意向だけは聞いてくれ、と必死で説得するのです。結局、鳩山は二島での妥結を許さないのですが、今でもこういうタイプの外交官はいますね。極端な強硬路線から突然、腰砕けになってしまったり、反対に、徹底して宥和政策を進めてきて、状況が変わって岩場に乗り上げてしまうと、一転して相手国を攻撃し出す。つまり、きわめて自己中心的なのです。

山内　それでは、当時の対中外交がうまくいかなかったのもよくわかりますね。アメリカや英国で学んだぐらいでは、中国の問題は簡単に解決しない。今でも外務省のエリートに、人事のめぐりあわせという面もあるのでしょうが、中東やイスラーム圏といった厄介な地域をまったく知らない人がいるのに驚いたこともあります。ところで、大方の「ABC」組は、中国問題を途中で投げ出す形で、またアメリカや欧州に戻ってキャリアを重ねていくというパターンが多いなか、ひと味違うのが幣原喜重郎です。彼はもっぱら宥和外交の体現者としてみなされがちですが、中国に対して非常に粘り強く、しかも原則を曲げずに、事に臨んでいました。

幣原は、原則的に中国が主権国家だという認識に立って、最初から「満蒙は日本の生命線」であるにせよ、それが中国の領土であることは認めていました。だから、南満州鉄道の本線、関東州の租借権は絶対譲ることはできないが、揚子江沿岸の重慶や漢口などの都市や太平洋

岸の厦門などで得た治外法権の放棄は、早くから選択肢に入れていたのです。

佐藤　それは裏返すと、聡明な帝国主義者だったということでもありますね。帝国主義外交の本質は勢力均衡です。譲れない一線を保持した上で、相手の力に応じていかに対応するかが重要だとわかっているので、けっして無茶なことはしない。

山内　その通り。国際法の理解も含め、そうした呼吸を幣原はよくわかっていた。いまこそ、幣原外交はもっと評価されていいと思います。

もう少し突っ込んで論じるならば、そこに語学力の問題がある。外務省のAB組でも、当時、幣原ほど英語を扱える人間は多くなかったのではないでしょうか。たとえば、盧溝橋事件に先立つ昭和九年四月に、外務省の天羽英二情報部長による非公式談話が、「欧米による中国への支援を非難する東亜モンロー主義」として猛反発を受けますね。いわゆる「天羽声明」ですが、このときも日本としては日中提携を強調したつもりでした。ここにも語学ギャップの問題が潜んでいるように思えてならない。

佐藤　それはきわめて重要な問題です。たとえば吉田茂は駐英大使まで務めながら、実は英語がまったくダメだった。サンフランシスコ講和条約のときも、当時の録音を聞けばわかりますが、これで大丈夫なのか、と心配になる英語です。広田弘毅も同様で、彼は英語で基準に達せず、一度、高等文官試験を落第しているんです。そこでいったん韓国統監府に籍をおいてから、翌年、再受験しています。

山内　戦後でも、外交官の語学にはいろいろな逸話がありますね。ある大使が英語で話していたとき、私の隣にいたトルコ人（もちろん英語は堪能です）がトルコ語で私に尋ねるんです。「彼は何を話しているのか？　私はまったく理解できないのですが」と。

佐藤　ロシア語になると、もっとひどいエピソードは山のようにありますよ。

日独同盟路線の推進者

佐藤　語学といえば、日独伊三国同盟（昭和十五年）の熱心な推進者だったのが、駐独大使を務めた大島浩です。彼は陸軍の軍人だったのですが、子供の頃から在日のドイツ人に言葉を習い、現地人と遜色（そんしょく）ない語学力で人

脈を築いたという伝説があった。ところが、戦時下のドイツに赴任し、大島の下で働かされた吉野文六氏（故人）にうかがうと、大島の会話力は自由に意思疎通をおこなえるレベルには達していなかったそうです。そのかわり、酒が強くて、ドイツ人でもかなわない。大酒を飲んで、友人となるというハッタリ力も外交官としては重要な能力ですが。

山内　大島という人物は「駐独ドイツ大使」と呼ばれ、日本ではなく、ドイツのために動いたと評されていました。はじめは陸軍の駐在武官補としてドイツに行き、ナチス幹部のヨアヒム・フォン・リッベントロップに近づいて、日独同盟路線へと突っ走っていったのです。

大島の推進した日独同盟路線こそ、日本の国運を大きく誤らせた、日本外交最大の失策のひとつでしょう。そもそもアジアの海洋国家たる日本が、はるか遠くに離れた欧州の大陸国であるドイツと提携して、何の利益があるのか。二流か三流の海軍しかもたないドイツに、一流海軍をもつ海洋国家が何を期待できるというのでしょうか。常識で考えれば分かるはずです。ここには、第一次大戦中に何度も英仏から西部戦線への陸軍部隊派遣を求められても、山県有朋らは拒否した、そうした叡智はまったくないのです。実際、対英米戦争が始まっても、三国同盟はほとんど有効に機能しませんでした。そのうえ、「ナチスの同盟国」という不名誉を、世界史に残すことになってしまったのです。

佐藤　さらにいえば、ナチス・ドイツが強烈な人種主

文春新書
健康診断は受けてはいけない
近藤誠
中村勘三郎さんや川島なお美さんは、がんを早期発見され、早期に亡くなった
早く見つけるほど、早く死にやすい
——人間ドックの逆説
日本では職場で強制される健診だが、欧米には存在しない。健診は過剰な医療介入を生み、寿命を縮めている。
●定価(本体740円+税)
文藝春秋
〒102-8008 東京都千代田区紀尾井町3-23
http://www.bunshun.co.jp

義を掲げていることも、同盟を結ぶ前にわかっていたはずです。ヒトラー自身、『我が闘争』のなかで、日本を劣等人種と位置づけています。そういう人種偏見をもっている国との提携をなぜ選択したのかということです。

山内　ヒトラーは日本よりもイギリスとの協力関係を切望していたのですね。太平洋戦争が始まって、マレー沖海戦で、日本が英国の戦艦プリンス・オブ・ウェールズを撃沈したときでさえ、ヒトラーたちは、イギリスの機動部隊がこんなに簡単にやられたと強いショックを受けたほどです。同じ白人が有色人種に敗北した事実に驚愕したわけですね。

佐藤　戦争も終盤になり、ベルリンにソ連軍が迫ってくると、大島大使らはドイツ南部の温泉地バート・ガシュタインに避難します。そしてベルリンの大使館に残留を命じられた吉野さんに、「大使館の倉庫から、バート・ガシュタインまで酒と肴を運び出せ」というとんでもない指示を下す。問題は、この時点での大島の情勢認識です。ヒトラーがベルリンの地下壕に籠り、自殺を決意している段階で、大島は南方に逃げれば大丈夫だと考えていた。

山内　その程度の認識力と判断力しかない人間が、日本を戦争へと引き込んでしまったわけですね。陸軍と外交官のダメなところだけをキメラのようにもっていた……。

佐藤　さらに大島は敗戦後、日本に移送される船上で、「日本に帰ってからは政治家になるしかないかな」と語っていたと言います。結局、東京裁判で終身刑になるのですが、敗戦という重大な結果への責任感も希薄としかいいようがありません。

松岡洋右はなぜ挫折したか

山内　今回は外交官を軸として、太平洋戦争に至る過程をみてきましたが、もうひとり大物が残っています。松岡洋右です。松岡は十二歳のときに、父が事業で失敗し、親戚を頼ってアメリカに渡るんですね。そして苦学して、オレゴン州立大学法学部を卒業し、外務省に入る。しかし、大正十（一九二一）年には、四十一歳の若さで外務省を退官しています。だから昭和八年に日本の首席全権として、国際連盟総会に出席したときには外務官僚ではなく、国会議員だったのです。主流派の「ＡＢＣ外交官」たちからすると傍流もいいところですが、なぜ彼が重用されたのでしょうか。

佐藤　私は、そこには派閥の問題も大きかったのではないかと考えています。戦前の外務省は大きくいうと、右派と左派に分かれていました。これはイデオロギーによる対立ではなく、対米戦の可能性が濃くなる中で、対米戦を辞さないと考える右派と、対米戦争はするべきではないとする左派に二分されたのです。ここで間違えやすいのは、戦後の言動によって、当時の立ち位置を推測してしまうことです。たとえば戦後、外務次官を務め、親米派とみなされた牛場信彦氏や、社会党左派から国会議員となり『陰謀・暗殺・軍刀』などの回想録で知られる森島守人氏は、戦中には対米戦争辞さずという右派の外交官でした。

松岡は、外務省内が派閥でがんじがらめになったところに、いわば外部からやってきた存在だったと思います。吉野文六さんにうかがうと、松岡のよさというのは、誰にでもフラットなところだったというんですね。吉野さんたち研修生を呼んで、「お前たち、外交官というのは辛い商売だよ。仕事のために犠牲にすることも多い。それなのに、よくなったなぁ」と親しく語りかける。若手の話もよく聞き、ユーモアのセンスに富んだ魅力的な人物だったといいます。

私自身は、松岡に似たものを感じるだけに反発もあります。たとえば松岡は死ぬ前にプロテスタントからカトリックに改宗しますが、日本人には珍しく、キリスト教の問題を内面化して、ナショナルなものとの一体化を考えた人でもあったと思うのです。国際連盟を脱退するときの「十字架演説」なども、そうした彼の教養が反映している。

ただ彼は組織の閾値、臨界点が分かっていなかった。たとえば三国軍事同盟のあと、ロシアとも結んで四国同盟にする、といったような雄大な構想は、国際政治学者ならばいいけれど、外務大臣としては描いてはいけなかった。なぜなら、外務省、さらには日本という国にはそれだけの基礎体力がなかったからです。また日ソ中立条約を結んだあと、独ソ戦が始まると、すぐにソ連を攻撃せよと唱えますね。あれも理論的には合理的で有効な判断たりえたと思うのですが、日本にはそれだけの機動性がなかった。日本の政治文化を理解できなかったところに、彼の限界があったのかもしれません。

山内　あの時期、松岡のような人物が外交のトップとして浮上したことに昭和史の面白さと怖さを感じますね。

平成21年3月23日第三種郵便物認可　平成29年7月1日発行(1、4、7、10月1日発行)第11巻第3号

文藝春秋 SPECIAL

BUNGEISHUNJU 2017 夏

アドラー心理学でうつと戦う 岸見一郎
脳科学的に正しい「もの忘れ」予防術

もっと言ってはいけない 脳と心の正体

これまでの常識は通用しない!
最新科学が明かす「心」「自分」「幸福」

巻頭特集
橘玲 特別監修

中野信子
サイコパスだけじゃない　危険な脳の扱い方

緊急対談
ボアズ・ガノール×佐藤優
テロ対策の権威が警告 北朝鮮危機の本質

Googleが本気で取り組むマインドフルネス入門